

子どもの胃カメラの支援をお願いします

キエフ市立第9小児病院は、消化器系専門病院です。首都キエフ全域から子どもたちが来ます。キエフに赴いた時は、毎回、この病院で、入院している子どもたちにヨガ療法の指導をさせて貰っています。小学1年生から中学3年生までの子どもたちが参加しますが、現地の医師によると胃潰瘍だそうです。何故胃潰瘍になるのかというと、理由は判らないと言われています。病院の医師は、ストレスが一つの原因と話していました。ウクライナ東部で繰り返られているロシアとの戦争で、父親が兵士として参戦しているためにストレスになっているとか、戦争により親が先行きに不安を感じて、それを子どもたちが敏感に感じ取っているからとか、そんな言い方をしていました。しかし、ロシアとの戦争前から胃潰瘍で入院している子どもたちは沢山いました。被曝の影響により、消化器系が弱いという人もいましたが、よく判らないというのが現状です。その子どもたちが胃カメラの検査を受けます。



キエフの生活と病院事情

旧ソビエト時代は、医療費は無料でした。しかし、1991年にソビエト連邦が崩壊し、その後、1990年代の経済危機に見舞われて、ウクライナ国の経済は大変厳しい状況になっています。一般市民の月収は、15,000円位と言われています。国立病院の医師ですら給料だけでは生活できないため、夜はタクシーの運転手のバイトをしてしのいでいると聞きました。また、給料の遅配のため、何か月も給料がないと国立病院の医師が話していました。そのような状況のため、病院の薬棚には、殆ど薬品がなく、日本から渡航された長崎大学医学部教授の亀井勉医師や東邦大学付属病院の木村宏輝医師が、日本の学校の保健室よりも薬がないことに、ありえないと驚かされていました。また、医療機器も旧式のものばかりで、その中で胃カメラも、ファイバースコープの先端にある器具が壊れたため、医師が何とか自作して、騙し騙し使っているような状況でした。また、チューブが子ども用としては太いため、小さな子どもには大変な苦痛を伴います。稀に食道を傷つけることもあり、何とか日本製の細いチューブのものを支援して欲しいと6年程前から毎回、言われていました。しかし、日本での価格は、1,000万円を越えるため、簡単に支援ができる金額ではなく、いつも話だけを聞いている状況でした。

担当のザムラ女医さんが、ある時、言いました。「いつも、いつも、胃カメラを支援して欲しいとばかり言って申し訳ないです。こんなことを聞くのは嫌でしょ。私も毎回、毎回、皆さんにお願いすることが辛いんです。でも、国からの援助は期待できないし、予算もないし、子どもたちのことを考えると、こうするしかないんです」と言われていました。毎回、聞くうちに、いつの間にか、また支援の話かという気持ちになっていた自分がとても恥ずかしくなり、ザムラ先生の気持ちを思うと、いたたまれなくなりました。



旧式の胃カメラを持つザムラ女医



胃カメラを送ろう！ キエフ市立第2小児病院の子どもたち

私立病院には最新の医療機器があり、西側諸国と遜色のない医療を受けることが出来るそうですが、一般市民は医療費が高いため行くことが出来ないそうです。そうした状況で、支援をしたいけれども支援できないというもどかしさと、なんとかならないものかと、毎回、渡航するごとに、心に重くのしかかっています。ところが、昨年国際ヨガ Dayの熊本支援のチャリティイベントで400万円集まったということで、木村慧心理士長が「2年経てば支援出来るぞ！」ということで英断してくださり、今回、胃カメラを送るためのチャリティイベントになりました。



皆様、どうか宜しくお願い申し上げます。